

## [課題演習概要]

# 小学校における「問い」が「問い」を生む授業の実践について

郡 将太

Shota KORI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：小学校，授業実践，哲学対話，道德教育，問い

## 1 研究の目的

塚本(2014)によると，授業における対話とは，「問い」と「返答」だという。授業における教師の発問は「発問自体が多義であり，様々な「問い」を内包している」のに対し，学習者は，「教師の発問を解釈し，様々な受け取れる「問い」の一つを「自分の問い」として「返答」する」としている。一見，教師の発問に対して答えているように見えても，答えている「問い」は，学習者特有のものだと考えられる。発問には，教師の意図がある。それはいくつかの答えを予想し，予想外の答えを含め，発問と答えが対応するものである。

子どもの「同じです」の声に，教師はつい安心して授業を進めている。しかし，本当に同じなのかという「問い」から，その考えに至る根拠や違いに気づかせ，新たな「問い」が生まれる授業，「問い」について考えたい授業を検討する。子どもの考えに対し，問い返ししながら対話することで，一つの「問い」から，さらに新たな「問い」を生む。梶谷(2018)では，「問い，答え，さらに問い，答えるという積み重ねが考えることであり，「問い」によって考えることである」と述べている。考えることは，自己もしくは他者との対話の中で行われる。

その対話の一つの方法として，哲学対話がある。簡単には答えが出ない「問い」に対して，子どもたちが自由に考え，自由に話し合う取り組みのことをP4C(philosophy for children 子どものための哲学)といい，その中で行われる対話を哲学対話という。子どもたちは，「問い，考え，語り，聞く」という体験をすることで，自ら考えて問い，自分たちが問いたいことを問うことができるようになる。このような子どもを育成するために，哲

学対話を用いて，「問い」が「問い」を生む授業を実践する。

## 2 研究の計画

実践Ⅰでは，「心を形に」という道德の授業の中で，授業の残り時間5分を使い，キーワードである心に焦点を当てて，『心って何だろう』という「問い」を子どもたちに投げかけ，その「問い」から新たな「問い」が生まれるか調べた。

実践Ⅱでは，宗像市立A小学校において，小学生6人，小学校教員2人，大学院生5人，大学教員1人の計14人が，ヨシタケ(2019)の「自分ってなんだろう」というテーマを用いて哲学対話を行った。研究の評価のために，「問い」が「問い」を生んでいる場面を調べるとともに，子どもの感想と自己評価などを収集した。

## 3 研究の内容

### (1)実践Ⅰについての考察

心がキーワードとなっていることから，『心って何だろう』という「問い」を投げかけたところ，子どもたちは心臓，頭(脳)，ドキドキするもの，自分自身といった回答をした。その後子どもたちの中から，『心はどこにあるのか』という新たな「問い」が生まれた。その「問い」に対し，身体の外にある(気持ちは他人に左右されるから)，自分の内側にある(すべてを外に出せているわけではないから)，どこにでもある(感情はどこにでも表れるから)といった回答があった。

### (2)実践Ⅱについての考察

初めに対話のルールとコミュニティボールの使い方を確認した。今回設定したルールとコミュニティボールの使い方を表1に示す。次に，教材の

読み合わせを行い、対話を開始した。

表1 ルールとコミュニティボールの使い方

ルール
①何を言ってもいい。 ②人の言うことを否定しない。 ③人の話をよく聞く。
コミュニティボールの使い方
①持っている人が話せる。 ②話したくなったら手を挙げて待つ。 ③ボールを持っている人が手を挙げている人の中から次にボールを渡す人を決める。

子どもたちの哲学対話を分析するにあたり、参加児童を子ども、それ以外を大人と呼ぶ。大人とは、小学校教員2人と哲学対話を練習した大学生5人、大学教員の計8人である。この対話における「問い」の総数は22であった。そのうち、「問い」が「問い」を生んだ場面を分類し、そのパターン4つ(A~D)を表2に示す。

表2 「問い」が「問い」を生むパターン

パターン	「問い」から「問い」	回数
A	大人→子ども	4回
B	子ども→大人	6回
C	大人→大人	6回
D	子ども→子ども	1回

例えば、大人が出した「問い」を受け、子どもが新たな「問い」を投げかけている場面をAパターンとした。「問い→答え→問い」の場合も「問い」が「問い」を生んだとみなした。同じ「問い」が複数のパターンに重複した場面が4回あった。

表3 「問い」が「問い」を生んだ対話の例

大人①：めんどくさいって言ってくれたんだけど、 <u>どうい</u> <u>うときにめんどくさいなって思うことがある？</u> (中略)
子ども③：さっき色々めんどくさいって言ってたけど、 <u>それって気分的？気分的に違う？</u>

表3は、大人から子どもへと「問い」が「問い」を生んだ場面である。大人①の「問い」に対し、子ども③がめんどくさいという言葉に関連した新たな「問い」を投げかけているのが分かる。その後、勉強がめんどくさいか楽しいかという話になり、自分の中に自分は何種類もいるのではないかという「問い」も生まれた。

このように「問い」は、他者が関わることで新たな「問い」となり、対話の内容を深めたり、他者の考えの幅を広げたりする。哲学対話を継続して行うことで、物事の本質を探ろうとする態度を養い、子どもは自ら考えて問い、自分が問いたいことを問うことができるようになって考えられる。

## 4 成果と課題

実践Ⅱ後のアンケート結果を表4に示す。アンケートの結果から、発表ができたことで対話への貢献感を感じたり、他者の意見を聞くことで自分の考えが変わったりしたことが読み取れた。さらに、心に残ったこととして、他者の意見を認め、他者のいいところを示す記述が多くみられた。

表4 アンケート内容

質問①あなたが上手く言えたことを教えてください。
・自分のいいところが言えた。 ・最初は少しはずかしかったけど、途中からいっぱい発表できた。特に自分が生きていることがきせきという内容が「確かに」と思った。
質問②誰が言ったどんなことが心に残っていますか。
・〇〇さんが「自分は前向きなことがいいところです。」と言ったことが心に残った。 ・〇〇さんが言った宿題はやりたくないけどがんばっているという言葉が心に残っている。
質問③また哲学対話をするなら、どんなテーマで話をしたいですか。あなたの「不思議(ふしぎ)」を教えてください。
・なんでふねがうごくのか。 ・わたしは、自然に関してのテーマをしたいです。

哲学対話直後の感想では、「いつも思わないことも話ができ、普通の小学生とはちょっと違う話ができとても楽しかったです。」「普段小学生同士の会話とかでは生まれない大学生のみなさんや大人の視点からの話とかがまた違った会話が、いつもとは違う会話ができてすごく楽しかったです。」といった発言があり、自由に話す(何を言ってもいい)ことの価値に気付くことができた。他者の「問い」を聞き、子ども自身も問う努力をしたことがこれらの感想につながったと考えられる。

今後の課題としては、どのような「問い」によって新たな「問い」が促されるのか、その条件を模索していきたい。

## 主な引用・参考文献

- 梶谷真司 2018 考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門 幻冬舎
- Mayeroff Milton 1971 “On Caring” 田村真・向野宣之訳 1987 ケアの本質—生きることの意味 ゆみる出版
- 塚本幸男 2014 子どもは、教師の「発問」とは異なる「問い」持つ 千葉経済大学短期大学部紀要 第10号, pp. 25-37
- ヨシタケシンスケ 2019 なんだろう なんだろう 光村図書出版 pp. 18-19